

ディベートを通して感じた 「世界」の大きさ

2004年度からSELHiの指定を受け、英語ディベートを授業に取り入れた岐阜県・私立高山西高校。全国高校生英語ディベート大会の常連で、11年にはトルコで開催された世界大会に出場し「世界」を体感した。ディベートを通して英語に強い学校との評価が定着し、グローバルな進路を目指す生徒も着実に増えている。

山間部にありながら
海外との接点が多い地域

2011年7月、トルコのイスタンブールで開催されたIDEA (International Debate Education Association) 主催のYouth Forum (英語ディベート世界大会) に、岐阜県・私立高山西高校は日本の高校として初めて参加した。1勝5敗と世界の壁を痛感する結果ではあったが、生徒は「世界」のスケールに圧倒されながらも悪戦苦闘し、その経験は何ものにも代えがたい財産になったようだ。

「ともかく英語力のレベルが全く違いました。テーマにかかわる背景知識の豊富さ、論理展開の鋭さにも圧倒されました。それでいて勝つことだけにこだわらず、ディベートを心から楽しんでる様子が印象的でした」(2年・及部一清さん)

「英語がうまく聞き取れない私たちにも、海外の高校生たちは優しく接してくれました。紛争地域であったり社会主義国であったり国が置かれた状況はさまざまでも、考えていることは私たちと変わらず、同じ高校生なんだということを実感しました」(2年・野村恭子さん)

同校は、古い街並みで知られ、海外からも多くの観光客が訪れる高山市内にある。人口16万人の飛騨地区唯一の私立校で、通学圏は広い。進学熱はそれほど高いわけではないが、小林隆徳教頭は「高校入学後、預った生徒たちをどれだけ伸ばせるかが勝負です。さまざまな取り組みを工夫して、生徒の学力や意欲や進学意識を高めていくことが重要になります」と語る。

高山市は「ミシランガイド」にも紹介されている国際観光都市で、日常的に外国人観光客を目にするこ

とが多い土地柄だ。県や市の国際戦略の一環として海外の学校との交流も多く、同校にも多くの外国人高校生が訪れる。山間部にありながら比較的海外との接点の多いことが、英語に対する生徒たちのモチベーションにも良い影響を与えている。

01年に始まった「岐阜県高校生英語ディベート大会」の創設にかかわって以来、英語教育の充実を図り、04年度にはSELHi(*)の指定を受けた。「全国高校生英語ディベート大会」に岐阜県代表として、

岐阜県・私立 高山西高校

◎2012年に創立50年を迎える。海外留学やディベート授業など国際理解教育に注力する。04年度にSELHiの指定を受け、06年全国高校生英語ディベート大会の立ち上げにも主導的な役割を果たした。10年度の同大会で準優勝し、IDEA Youth Forum (英語ディベート世界大会) に出場を果たした。

設立 1962(昭和37)年 形態 全日制/普通科/共学

生徒数(1学年) 約200人

11年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、筑波大、東京医科歯科大、東京工業大、金沢大、名古屋工業大、岐阜大、琉球大など45人が合格。私立大は、慶應義塾大、東京理科大、早稲田大、立命館大などに延べ162人が合格。

住所 〒506-0059 岐阜県高山市下林町353

電話 0577-32-2590

Web Site <http://www.takanishi.ed.jp/>



野村 恭子
Nomura Kyoko
岐阜県私立・高山西高校
2年G組生徒(取材時)



及部 一清
Oyobe Kazukiyo
岐阜県私立・高山西高校
2年G組生徒(取材時)



堀尾 譲
Horio Yuzuru
岐阜県私立・高山西高校
教職歴13年。同校に赴任して14年
目。2学年主任。「生徒が希望進路に
近づけるよう最善を尽くしたい」



小林 隆徳
Kobayashi Takahori
岐阜県私立・高山西高校教員
教職歴24年。同校に赴任して23年目。
「高山西高ファンの輪を広げたい。ど
こまでも、どこまでも……」

Profile

同校の英語教育の柱であり、デイ
ベート大会連続出場の原因力にも
なっているのが、SELHI指定を

デイベートを教師対生徒で
行い、緊張感を生む

05年から7年連続出場を果たしてい
る。今や押しも押されぬ岐阜
県の英語デイベートの中核的存在だ。

機に導入した英語デイベートの授業
である。特進コースの1・2年次に
おいて、10〜12月に短期集中で行わ
れる。期間を限定しているのは、生
徒の気持ちの切り替えがしやすいこ
とと、デイベート大会の選手選考も
兼ねているためだ。

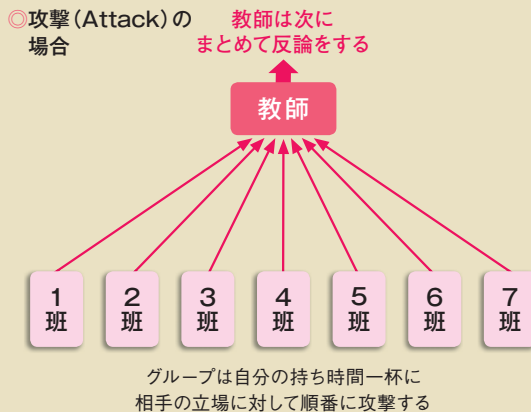
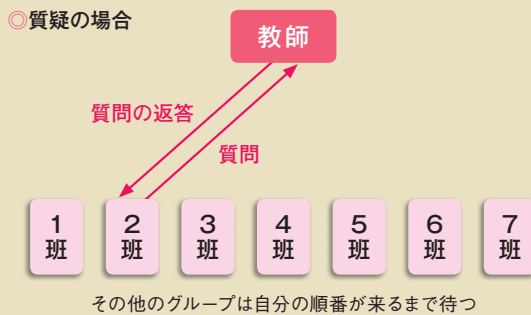
デイベートの授業といえば、生徒
のグループ同士で討論するのが一般
的だが、同校の方法はユニークで、
担当の堀尾譲先生と生徒のグルー
プ(4〜5人)が対戦する。剣道の
掛かり稽古のように、堀尾先生が1
人で立論や反ばくなどの諸役をこな
し、次から次へと挑んでくる生徒た
ちと舌戦を繰り広げる(図1)。

「生徒によって英語力にばらつき
がある中で、一定のレベルの討論を
することが狙いです。生徒同士で
デイベートを成立させるには、この
方法が最適です」(堀尾先生)

もう一つの狙いは、適度な緊張感
の中で英語を使わなければならない
状況をつくることにある。

「生徒同士が向き合って行うペア
ワークでは、なれ合いになってしま

図1 教師対生徒の構図



* 学校資料を基に編集部で作成

デイベートを楽しみながら
英語への興味を育む

先生の言葉通り、デイベート中の
堀尾先生は、生徒の英語力を考慮せ

うことがあります。デイベートとい
う勝負の場で、私が生徒の聞き取れ
る以上のスピードで容赦なく英語で
語り掛けることによって適度な緊張
感が生まれるのです」(堀尾先生)

ず、外国人が話すのと同じようなス
ピードで話し掛ける。初めて海外に
行き、英語のシャワーを浴びた日本
人旅行者が、嫌でも英語を話さざる
を得ないのと同じ状況に、生徒を追
い込んでいくのだ。

生徒が英語を使わなければならない
状況をつくり出す一方、英語が苦
手な生徒でも積極的にデイベートに
参加できる環境づくりに留意する。

その一つは、英語の問いに対して



トルコのイスタンブールで開催された世界大会に参加した3人の選手。左から及部さん、大坪篤史さん(3年)、野村さん

日本語で答えてもよいというルールだ。英語の発問に日本語で答えることを許しており、慣れていくにつれて、徐々に英語を増やしていく。

また、ディベートの授業に入る前に、テーマに対して予想される立論、反論、要約などを堀尾先生があらかじめシミュレーションして膨大な例文集を作成し、生徒に配布している。生徒はそれを見て選び、試合で活用する中で、英語の使い方を覚えていくのである。

相手に内容が通じるのであれば、その場では細かい文法上の間違いは指摘しない。堀尾先生自身も、完璧

なモデルを示そうと意識はせず、純粹に試合を楽しむ。互いの力量をさらけ出すことで、ディベートの楽しさを理解し、失敗を恐れない姿勢を身に付け、英語への興味につながっていくことが重要なのだ。

ディベートを通して 英語学習への意欲が向上

もう一つの特徴は、全く同じ内容のディベートを日本語と英語で行う点である。3か月のディベート授業期間の前半は、日本語によるディベートを繰り返す。始めの頃は堀尾先生が連勝するが、やがて生徒が知恵を出し合い、力を合わせて堀尾先生を圧倒するようになる。そのタイミングを見計らって、英語に切り替えるのだ。内容は、それまで日本語で行ってきたディベートと同じである。一度日本語で行っているのだから、内容は推測でき、反論したいこともある。しかし、それを英語でどう表現してよいか分からない。だからこそ、単語や文法を学び、知識をつけていこうとする欲求が生まれるというわけだ。

「ディベートを使って英語を学ぶのではなく、ディベートの中で英語を使うという考え方が基本コンセプトです。言いたいことがないのに言葉だけを覚えるのは本末転倒です。話したい内容があつて、初めて英語を使う必然性が生まれるのです」(堀尾先生)

実際、ディベートで英語を使う機会が多くなったことで、普段の授業に対する生徒のモチベーションも高まっていく。野村さんは「いろいろな言葉や言い回しを知っていた方がディベートでは有利。勝つために、たくさんさんの単語や構文を覚えたいと思うようになるので、普段の授業にも力が入ります。逆に、授業で習った単語や構文をディベートで使うことが文法の総復習や実践練習になるので、より知識が定着しやすくなります」と語る。

及部さんも次のように話す。

「ディベート中は頭の中で和訳する時間がないので、英語を英語のまま理解することが出来るようになります。辞書で単語や例文を調べる機会も増えるので、語彙が増え、英文を読むスピードも速くなりました。

日常会話に必要なコミュニケーション能力と同時に、大学入試にも対応できる英語力も身に付いていることを実感します」

当初、同校には授業にディベートを取り入れることに対する生徒の負担感を心配する声もあった。しかし、進研模試やGTEC for STUDENTSなどの客観的なデータから良い結果が得られるようになり、生徒も教師も、英語ディベートによる入試学力の伸びを実感するようになってきた。学校に対する地域の期待も徐々に大きくなってきた。

グローバルシチズンの 一員であるという実感

教師の懸念を取り払ったのは、英語力の向上もさることながら、ディベートに取り組み生徒たちの生き生きとした姿だった。

ディベート大会に出る学校代表は1チームだが、その他の特進コースの生徒は裏方として大会の準備を手伝う。リサーチをしたり、練習試合の相手になったり、試合を見て客観的なアドバイスをしたりと、代表

チームを支援する中で一体感が生まれていくという。全ての生徒が当事者意識を持ち、自分は出場しないから関係ないという生徒はいない。選手たちの活躍を、こうした Unsung Heroes (縁の下の力持ち) が支えている。

学校一丸となった結果、10年に岐阜県で開催された第5回全国高校生英語ディベート大会では、当時1年生だった及部さん、野村さんたちのチームが準優勝に輝き、IDEAの世界大会への出場権を手にした。そこで、生徒たちが得たものは、冒頭で紹介した通りだ。

世界レベルのテクニク、高度な英語スキルに圧倒されたものの、文化も人種も違う国の高校生と分り合えた喜びを味わうことが出来た。また、どんな小さな国の高校生もマングやゲームなどをきっかけとして日本のことを知っていることが分かり、日本文化の素晴らしさを再認識すると同時に、日本人でありながら自国のことについて知らない自分にも気付かされた。

そして、どの国の高校生も、自国に対して誇りを持っていることも感じた。

「外国の高校生たちは、肌の色や人種が違っていても、それぞれ認め合っているようでした。私たち日本人だけが壁をつくっているように思え、自分たちがとても遅れているように感じました。それでも、自分から心を開いて話しかければ快く受け入れてくれる。大会に参加したみんなが一つの家族のように感じられました」(及部さん)

「世界大会に出場して実感したのは、自分が日本人であると同時にグローバルシチズンの一員であるということ。大学に進学したら、英語力を磨くだけではなく、さまざまな専門知識を身に付けて、海外で世界の仲間たちと渡り合っていきたいと思います」(野村さん)

**グローバル社会で必要なのは
自分の意見を主張できる力**

SELiの指定とディベートの

導入、大会への出場などを通して、英語に強い学校としての評価が定着したことも大きな成果の一つだ。実際、及部さんと野村さんも、同校の英語教育に魅力を感じて入学を決意したという。同校はこうした活動を通して、少しずつグローバルな活躍を目指す生徒たちに選ばれる学校になりつつある。

「大会出場者以外の生徒も、歴代の学校代表が全国大会で好成績を残しているのを見て自信を深めている



世界大会での様子。各国の文化を紹介するイベントで交流が一層深まる。左手前が日本ブース

ようです。海外での活躍を志向する入学生が増えているのも、彼らの活躍が大きな刺激になっているからでしょう」と小林教頭は語る。

最後に、グローバル社会に必要な教育についての展望を、堀尾先生に聞いた。

「『インターナショナル』は国と国との関係を前提とした概念ですが、『グローバル』はそういう垣根がなくなった状態です。そうしたグローバル社会で大切なのは、世界の人々が互いのバックグラウンドを尊重しつつ、それぞれの意見や利害をぶつけながら共通の価値観を築いていくことだと思います。その時に必要なのは、それぞれの個人がはっきりと自分の主張を伝えるプレゼンテーション能力です。いざという時に自分を主張し相手を説得する一方、街角で人と話している時にも自分や日本について語ることが出来る。そうした力を伸ばしていくことで、生徒が活躍するフィールドは、より広い世界へ広がっていくのではないのでしょうか」